



もんむすぐれずど!5

~サキュバス屋敷のペット生活~

「あーっ、^{うま}美味し！ あーっ、美味し！」

金髪の少年天使、ラビエルのかん高い声上がる。

ラビエルとアズサはマキナに連れられて、しゃれたカフェで間食を楽しんでいた。三人は同じテーブルを囲い、それぞれの焼き菓子と紅茶を堪能する。

みらい 「味蕾に貼りつく濃厚にしてほうじゆん豊潤な甘み……。ぬぬう！ このタルト、こげたリンゴを生地とともに焼きこむことで表面をキャラメリゼしておるな！」

声をとめると、ラビエルは皿に載せられた温かいタルトをふたたびほおぼる。



「んうっ……！ こげるほど焼きこむことで、甘みだけでなくこんがりとした香ばしさまで生まれるとは。うん、これは美味し、だ。なるほど、バターで炒めておるのか。なんという、なんという発想か……」

ラビエルは背中に輝く小さな羽をゆらすと、^{こうこつ}恍惚の表情でタルトを飲みこんだ。



「ラビエルうるさい。もうちょっと静かに食べなよ」

ラビエルより少し^{としかさ}年嵩に見える、栗色の髪をした少年の
アズサが口をはさんだ。

「でもお姉さん嬉しいな。ここまで美味しそうに食べて
くれるなんて、おごりがいがあるわ」

長身で、見るからに壮健な女性のマキナは、タルトを
ほおぼるラビエルをニコニコとながめる。



「……」

アズサは一瞬、表情を硬直させる。そして、目の前の
チーズケーキを食べはじめた。

ケーキを飲みこむと、アズサはとうとう滔々としゃべりだす。



「うわあ！ このチーズケーキのどっしりとしてしっとりとした
甘み！ まるでほろ酔いでもたれかかってくる貴婦人のような……」

アズサはさらにひとくちを運ぶ。

「ずしりとよりかかるチーズの重み。次にフワッ、サクッとした
生地が舌を慰めて……。少量の白ワインの香りづけで鼻腔に余韻を
残していく。完璧だ」

彼は紅茶をすすると、もうひとくち食べる。



「なめらかでやわらかでひかえめな甘み。それでいて、コクがある。
おや？ まだ……まだなにかあるのか！ 底に貼りついているものは
なんだ？

これは……ビスケットを砕いてバターを混ぜて焼いた生地！
それをケーキの下にしこむとは。おおお……まさか焼き菓子
ごときに涙をこぼされるとは……。

シェフ、シェフを呼べ！ このチーズケーキを作ったのは
だれだーっ！ ファッキンデリシャスゲロ美味し!!」

「アズラエル、うるさいです」

ラビエルが口をはさんだ。



「じゃあね」

マキナは一足早く自宅へと向かった。



「ぼくたちも帰りますか？」

ラビエルはアズサに首を向けて聞いた。

「せっかくだから街を見て周ろうよ。魔物がいるかもしれないし」

「わかりました」



アズサとラビエルは通りを歩く。

「いないね……」

アズサはぽつんとつぶやいた。

「ですねー」

ラビエルは気のない返事をする。青空が広がる午後の街。
ちらほらと人が通る石畳いしだたみの道。



歩きながらふと声をもらす。

「……ねえ、ラビエル」

アズサは後ろを歩く天使に話しかけた。

「天使はさ、魔物を^{とうぼつ}討伐してくれないの？　ここはいつも魔物に荒らされてるのにさ」

「だから、ぼくが来たでしょう」

ラビエルが返す。

「そうだけどさ。もっと武装した天使とかがさ、おおぜいこの街に来て一気にバババーツてやっつけちゃうとかさ」





「ここは人間の世界ですからね。基本的に人間がなんとかしないとダメですよ」

「そうなの？ え、なんでかな？」

「例えばですね」

ラビエルは近くの薄汚い商店を指差した。

「あのお店。まったくお客がいませんけど、どう思いますか？」

「食器屋さん？ あんなもの、だれも買わないよ」

「どうしてですか？」

「だってこの近くに大きな市場があるもの。みんなそっちに行くに決まってるじゃん。あんなところにポツンと一軒だけあってもさ、入りにくいし、気軽に冷やかさないし。今どきあんな商売は時代おくれだよ」

「じゃあ、アズラエルがあの店に入って店主を説得したらどうですか？」

「説得う？」

「だって今どきあんなせまい裏通りで食器屋さんなんて通用するはずがないでしょう。それを伝えて、もっといいやり方をいっしょに考えるとか」



「いやいや、ぼくは知り合いじゃないし。他人にいきなりそんなことを
言えるはずがないじゃん。よけいなお世話だよ」

「そういうことですよ。天使もむやみと人間の世界に干渉するわけには
いかないんです」

「……」

「ぼくがアズラエルに力を与えただけでも、めったにない計らい
なんですよ」

「そっかあ……」

アズサは空を見上げて息をついた。



「でもさあ、ラビエル」

ゆっくりと街道を歩きながら、アズサはしゃべり続ける。

「もう少し強いって言うか、戦闘的な天使がさ、一人来てくれるだけでもなんとかなるんじゃないかと思うんだよね。それかさ、頭のいい天使がこの街の偉い人にさ……」

思いつくままに話を述べる。

「ねえ、ラビエルはどう思う？」

振り向くと、視界がふさがる。



柔らかい二つの丘にアズサの顔がぎゅっと圧迫された。

「つかまえた」

聞きなれないだれかの声。



アズサは見知らぬ女性の胸に抱きすくめられていた。

「あ、あの……どちらさまでしょうか」

「わたくしナターニアと申しますわ。あなたの
探し相手」

「……え？」



ナターニアは彼をぐいぐいと抱きしめる。アズサは水色のワンピースの下に存在する豊満な肉体を感じた。うっすらと甘い香りが鼻をくすぐる。

「探しているのでしょうか。魔物を」

「魔物？ お姉さんが……？」

「わたくしもあなたを探していましたの」



ラビエルがかけよって来た。

「アズラエルー。むこうにいい匂いの屋台があります。ぼく、食べて
みたいです。……あ、あれは！」



「魔族をつけねらう暴漢がいるとのうわさが広がって
いまして、どんな方かと思いましたが……。まさか
こんな愛くるしい男の子だったなんて」

「あ、愛くるしい……？」

アズサは顔を紅く染める。彼女を見ると、
長い金髪の上に二本の角を生やしていた。



「つらかったのでしょうか。もういいですよ。わたくしが
慰めて差しあげますわ」

「ええ……？」

「仲良くしましょうね」



「アズラエル離れて！ そいつはサキュバスです！」

ラビエルの大声がアズサの耳に入る。

「はえ？」

アズサはとぼけた声を返す。

「はえ？ じゃないです！ 早く変身して
そいつをやっつけて。顔面がトマトみたいに
真っ赤に腫れあがるまでボコンボコンにして
やってください！」



「ええ？ ムリだよ。こんな綺麗なお姉さんを殴るだなんて……」

アズサはナターニアに抱かれたまま、トロンとした目つきで答えた。

「だーかーら、そうやって誘惑するのがサキュバスのやりくちなんです！ そのままそいつの腹にヒザ蹴りをブチかましてゲロを吐かせてやりなさい！」

ラビエルはヒステリックにわめき続ける。



「あらあら。嫉妬深いぼうやが二人の恋路こいじを邪魔しに来ましたわね。
でも恋とは障害があるほど燃え上がるものなのですわ」

ナターニアは言った。

「なにが恋ですか。年中発情している腐れ淫魔の
くせに」



「ラビエル。こんな優しい人にひどいこと言っちゃダメだよ」

アズサはだらしない顔で天使をたしなめる。

「ああもう、すっかり誘惑されて……」

ラビエルはあきれた。



「これから、わたくしの館へまいりましょうか」

ナターニアはそう言ってアズサにほほえんだ。

(はあ……柔らかくて、いい匂い……)



彼女の包みこむ色香に、アズサはぼんやりとする。

「ダメ！ アズラエルを離して！」

ラビエルはアズサの袖をつかんでそでグイグイと引っぱる。

「ふうーっ」

ナターニアはラビエルの顔を目がけて息を吹いた。

「んあ……」

ラビエルのまぶたがゆっくりと閉じていく。ぺちゃんこへたりこむと、その場で寝こんでしまった。



「うふふ。では、まいりましょうか」

ナターニアはアズサを抱いたまま、黒い翼をはためかせ、
いずこかへと飛び去っていった。



アズサの意識に、とりとめもない夢が浮かんでは消える。
温かい息が、どこか敏感な箇所^{かしよ}にかかる。続いて、ねっとりとした感触にくすぐられる。

「ん……」

アズサは混濁^{こんだく}した意識の中でかすかに声をもらす。

包皮からはみ出たピンクの亀頭を、温かく湿ったものが這いずり回る。
皮の中に入りこみ、ヌルッと奥へ進む。

「んんっ……」

下半身をおそう悩ましい違和感に、アズサは目を覚ました。

「んな……、なにをしてるんですかっ」

いつの間にかベッドに寝かせられていたアズサは、ズボンと下着を脱がされていた。

ちゅぽ

ちゅぽ

ナターニアの口があらわにされた性器を啜えこんでいる。くちびるに亀頭を押し当て、夢中でしゃぶり続ける。

「食事ですわ」

と言ってチラとアズサの顔を見ると、ナターニアはふたたび性器を咥え、ちゅうちゅうと吸い始める。

ちゅう

ちゅう

「ふああ、いけませんお姉さん……。そんな、初対面で……」

アズサの言葉にかまわず、彼女は棒を深く咥えこむと、吸いあげつつ咥えた棒を口からもどす。

口内から出された性器は、ナターニアの唾液だえきでぬらぬらと輝いていた。

「美味しいですわ」

ナターニアは柔らかく笑みをこぼした。

まるで優雅な朝のひとときといった様子だ。

「アズサもいいでしょう。こんなにおちんちんが固くそそり立っていますわ」

ナターニアは性器の先っぽの、皮からはみ出たピンクの先端を指でつつく。ペニスはピクンと反応した。

アズサは名前を呼ばれた親しみと快さを感じると同時に、
興奮状態の性器を指摘され激しい羞恥を感じた。

「いや、これは……」

ちゅぽ

ちゅぽ

「照れなくてもよろしいのですよ。サキュバスのエサになった
おちんちは、みんなうれしがるから」

そう言うと、ナターニアはペニスを啜える。

そのまま口を上下にピストンし、肉棒を口内でしごく。

「あうんっ……」

ぢゅぽっ
ぢゅぽっ
ぢゅぽっ

性器から濃密な甘い快感が全身に広がり、アズサはたまらず声を上げた。

「んむ、むぐっ」

ぢゅぽっ

ぢゅぽっ

ぢゅぽっ

ナターニアは声をもらしながら、そそり立った肉棒の味を堪能する。
ぐちゅぐちゅと卑猥な音があたりにひびく。



ひとしきり堪能すると、くちびるを亀頭にくっつけて、尿道からあふれ出るカウパー腺液をチュルチュルと吸い取る。

「くううっ」

ちゅっ

ちゅっ

アズサの性感帯が震え上がり、彼は背筋を反らせて声を絞りだす。

ナターニアはしつこくペニスをしゃぶり続けた。舌をくるくる
回しながら、口内の龟头もてあそを弄ぶ。

「あー……もう、もうだめえ……」

ちゅる

ちゅっ

アズサは快感に敗北したらしい顔で、両足をひくつかせた。